

寛さんのこと

浅山佳郎

僕が神奈川大学に勤めて3年くらい後に、日本史の新しい教員が来ることになった。それが寛さんだった。

年齢がほぼ同じで、大学は違うが、彼が史学科の国史専攻、僕が文学科の国文専攻、彼も僕も古典中国語で書かれた中国および日本の資料を使って研究している、留学生教育に携わったことがある、と共通点がいくつかあったので、自然とよく話すようになった。とくに、僕たちは日本史と国語の入学試験の担当で、どちらも専門学科がないにもかかわらず、出題しなければならぬという悩みをかかえていた。その意味で、僕たちはちよつとした共闘の同志とでも呼べるような関係だった。寛さんが亡くなるほんの数週間前も、次年度に向けてこの問題をどう申し送るか話し合つたばかりだったので、「おい、入試という問題をほつぱつたままじゃないか、このあいだ話したことは、全部僕に押し付ける気かよ」という、少し裏切られたような気分がする。

研究になると、僕は一方的に寛さんに教えてもらつてばかりいたように思う。寛さんの研究の面白さに気づかさ

れたのは、「拍手」に関する論文を彼が書いているときが最初だった。ある時彼から「中国ではどんな時に拍手をしますか」と聞かれて、外交の舞台などで外来の客を迎えるときなどに行っている拍手の映像くらいしか浮かばなかった僕は、そんな間の抜けた答えしかできなかったのだが、「なぜ、それが問題なの」という僕の質問に対して、寛さんは「日本では神様に、かしわで」をするでしょう」と教示してくれた。僕は、日本語学が専門であるにもかかわらず、うかつにもその時まで「かしわで＝拍手」が音読みで「はくしゅ」になることに気がつかなかった。語の意味は文字にまどわされずに、まず音から考えるという言語学の基本を、史学の寛さんから教えてもらったわけで、ちよつと赤面の思いをしながら、その時彼が示してくれた根拠となる資料処理の精密さとともに、寛さんの研究は面白いぞと強く印象づけられた。

それから、日本語の単語の意味を歴史的に考えようとするときには、まず寛さんに関する文化的風習などを聞きに行った。そのたびに、寛さんはあの丁寧で精密な態度で、僕の質問に答えてくれた。

逆に寛さんからは、時々、古典中国語の日本語訳である「漢文訓読」について聞かれた。僕は、漢文訓読の文法を日本語と中国語の対照という観点から考えたいと思っていたので、そんな計画を話したことがあったのだが、寛さんからは、それは大切だから早くきちんとまとめるといつか過分の激励を受けた。これをもし寛さんとの約束だとする、僕はまだその約束をはたしていない。いつか寛さんが使ってくれるような漢文訓読の文法書を書き上げたいと思うのだが、それを見せる相手がいなくなってしまった。

そのことが、いちばん口惜しい。